

福島敏夫随筆集「乙戸南雑話【花鳥風月及び星・虹を愛でながら】」から

主宰論説27

天災と人災と複合災害

太古の昔、人間にとっては必ずしも優しくない大自然の猛威に対してほとんど無力状態に置かれていた遠い人間の祖先たちは、火を巧みに使って多彩な食彩を得、道具を活用して衣住環境を整え、言語を駆使して情報交換を行い、太陽と水と土地と資源のうまい利用により、文化・文明を切り開き、生活を豊かにしてきたといえる。昔から、地震、火山の噴火、津波、干ばつ、洪水、台風、竜巻、雷、火災（火は、人間の生活にはなくてはならないが、使い方を誤ると大変な惨事になる。地震や雷や火山の噴火と連動することも多いし、乾燥した森林では、高気温で自然発生することも多いようだ）、風水害、雪害など、いろいろな天変地異に悩まされながらも、たくましく立ち上がり、復興を遂げ、新しい形で、社会を再構築してきたのが、人類であると考えられる。最近、広域的、地球規模の災害等も考えられるが、もともとの自然は、かなり、局所的で、気候・風土的な特徴を持っていたようで、住の源である建築物も、それに融合する様式が多いようである。だが、最近、通常の規模や程度を超えた想定外の天変地異とも考えられる自然現象や災害も多い（寺田寅彦博士をはじめとする多くの先人の方たちは、教訓や句碑として、災害への対応の必要を教え伝えていた）。人間の諸活動に関連した人災と連動した複合災害も、多くなってきているようである。建設残土による盛土と豪雨による土石流による災害は、まさしく複合災害というべきものだろうと思われる。太陽光発電のためのメガソーラーの土地確保のための山の斜面の森林の伐採により、保水能力のなくなった河川領域での豪雨と土砂災害なども、環境配慮と複合災害の自己矛盾の事例だろう。国連が挙げている持続可能開発目標（SDGs）の中には、地球環境問題として、海洋環境の保全、生物多様性の維持、貧困・病気の撲滅等も掲げられているが、気候変動問題が、大きく取り上げられるようになった。目標とした数値目標はすでに超えていて、もう手遅れと考える人も少なくないようであるが、今からでも、少しは、それに付随する自然災害の頻発と激甚化を抑えられるだろうという希望でもって、努力することも大切であろうと思われる。近未来及び将来の人類に夢と希望のある生活を送ってもらうためには、有効であろう。だが、激甚化する自然災害と人災と連動する複合災害のことを考えると、すぐにも命の危険性が迫っているかもしれないという意味で、複合災害に対する的確な防災・減災対策を急いだほうが良いと考えるは、筆者だけでないようである。

自由短歌：

青い空天災・人災数あれど近年多い複合災害

令和3年12月14日

山と川と海

山と川と海は、世界遺産にもなっている色々な絶景により、人を感動させるとともに、水の流れを通じて、扇状地や平野を形成し、農地や森林などを育む。海や山の幸は、多彩な食彩をもたらす。文化・文明を支えるいろいろな事象に関連するが、人間に特別な思いを抱かせる話も多いようである。

昔から、山に関連した歌も多いし、川に関連した歌、海に関連した歌も多いようだ。

山に関する歌としては、「青い山脈」、「雪山讃歌」、「山の娘ロザリア」などが、思い出される。川に関する歌としては、「川の流れるように」、「川は呼んでいる」、「美しい青きドナウ」、「ドナウ川のさざ波」、「ローレライ」などが、思い起される。また、海に関連したもの、かなり多いようだ。「ソーラン節」、「よさこい節」などの、海に関連した民謡も多い。また、「ボルガの舟歌」、「ホフマンの舟歌」、「ゴンドラの歌」など、舟に関連した歌も多い。昔は、それらの美しい景観・情景が、人の癒しとなっていたことの表れかもしれない。文明生活が進んでも、自然と生物および人類の共存共栄を考え、生き生きとした自然の保全も忘れないようにしたいものである。

自由俳句：

日本海冬の嵐に波高し

令和3年12月14日